

## 子どもを守る防犯対策

院長

近年、子どもを対象にした犯罪が増加しています。昨年は小学一年生女児の殺人事件が2件も連続で起こり、栃木での事件は未だ解決していません。近隣の小松島小学校でも不審者がみられ対策が講じられています。スペルマン病院でおきた新生児誘拐事件もあり、いつどんな犯罪に巻き込まれるかわかりません。2月に起きた滋賀県の幼稚園児殺人事件は、まさに青天のへきれきでした。こんな事件まで起ると、本当に子どもを守る方法が無くなってしまいます。

先日「お母さんクラブ」で仙台北警察署のご協力を頂き、「子どもの防犯対策」を開催しました。その内容もふまえて、子どもを守るための方法を考えてみましょう。

子どもをターゲットにする様々な犯罪に関しては、多くの場合本人や周囲が犯罪に対する意識を持っていれば、その多くは未然に防ぐことが出来るものです。連れ去りなどに巻き込まれるのは、一人で行動するようになる5歳～小学校の低学年の子どもたちです。また、親や友達目から離れる一人での被害がほとんどです。さて、子どもたちを守るために、どんなことに注意が必要なのでしょう。子どもたちを犯罪から守るためには、家庭でのしつけ、学校での教育、そして社会での対応が重要です。このうち、どれが欠けても十分な対応とは言えません。

まずは、家庭の役割を考えてみましょう。最も大事なことは、子どもから目を離さないということです。以前、親がパチンコに熱中している間に、子どもが連れ去られた事件がありました。事件だけではなく、事故の多くも親が目を離した隙に起きています。とくに幼児期では、最も大切なことなのです。もう一つ、しつけということも忘れてはいけません。年齢が小さいほど、理性より本能が働きます。知らない人についていけないということを、何度も繰り返して教えることが大切です。この場合言葉で伝えるだけではなく、様々な方法を使うことを考えてみましょう。例えば、絵本やテレビから、怖いことや注意することを伝えることもいいかもしれま

<b>自分を守るルールです!</b> (なんどもくりかえしておぼえましょう)	
<b>1</b>  ひとりではない、ひとりであそばない ●ともだちをひとりにしない、ともだちとはなれない ●人通りのない場所、さびしい場所には行かない	<b>2</b>  知らない人についていけない、車にのらない ●知っている人でも、「家の人に聞いてから」と言っていないといけない ●車からはなれる
<b>3</b>  家を出るときは、必ず家の人に行き先を伝える ●だれと、どこで、なにをするか、何時に帰るか。	<b>4</b>  こわいときは大声で助けを求める ●「キヤー」と言う声は、遊んでいるように思われてしまいます。
<b>5</b>  何かあったら必ず大人に話す	

せん。お子さんと一緒に、町内を歩いてみることも役に立ちます。犯罪や事故に巻き込まれる恐れのある場所を歩いて、繰り返し教えることも必要です。

小学校へ入学すると、大人の目が届かないところでの行動が多くなります。登校下校が事件に巻き込まれる状況のひとつです。子どもの犯罪の増加から、防犯マップを作る動きがあります。防犯マップを作る目的には二つで、当然危険な場所を把握することと、作る過程を通して子どもたちに身を守る方法を伝えることです。他の取り組みとしては、緊急(不審者)メール配信があります。従来、学校には電話による連絡網がありますが核家族や共働き等で連絡出来なかつたりと、本来の機能が得られなくなっているようです。現在では多くの親御さんは携帯電話を持つようになり、電話よりメールの配信の有効性が確認されています。費用などの問題がありますが、今後各学校が対応できるようになることを希望しています。

しつけ・教育が役に立つと言うことは異論がありませんが、それだけで充分ではありません。子どもを守るためには、社会での取り組みも重要な課題です。子どもが犯罪に巻き込まれるようになり、小松島小学校ではPTAの有志で“パトわん”が活動し始めています。仙台市内では宮町の“民間交番”など地域住民等による小集団のパトロール隊がひとつの「ユニット」として結成され、ボランティアとして犯罪防止活動を展開しています。子どもを持つ親にとってこのような活動があることを知ることは重要なことですが、我が子のことを他人任せにせず積極的に参加するという意識も必要です。今の親は口は出すけど手は出さないなんて、言われたいようにしたいものです。

子どもを犯罪や事故から守るためには、親の努力だけでは不十分です。学校や社会(地域)と繋がりを持って、自ら子どもたちを守るための取り組みに参加しましょう。しかし、親の責任も大きいものです。子どもから目を離さない、様々なルールを守るしつけは身に付けさせましょう。

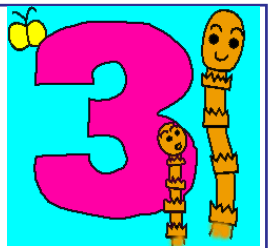
### 3月のお知らせ

- ・在宅休日当番  
3月21日(火) 春分の日  
9:00~16:00
- ・栄養育児相談 毎週水曜日



## 読者の広場

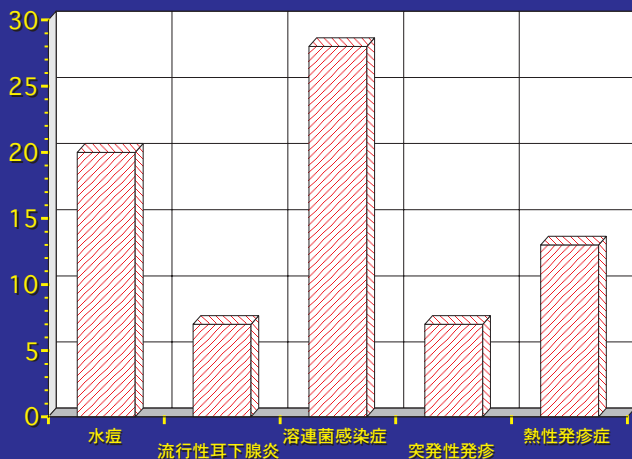
先月はメールの嵐もおさまり、頂いたメールは13件でした。今回はメールが少なっただけでなく、医療相談が多く頂きました。ひとつ、青葉区のK(本人の希望で匿名：はずかしいとのこと)さんからのメールを紹介します。「昨日はありがとうございました。午後から熱がさがり今はすっかり元気です。いただいた薬で回復を待とうと思います。なんとと思ったら26日北部に先生が・・・というのうれしい(?)です。先日、ニュースで小児科医が減り続けていると言っていました。産婦人科と同じでキツイそうです。そんな中、川村先生のありがたいこと。小児科医であるだけでなく、ネット相談までしてくれる小児科の先生に出会えたこと本当にラッキーです。感謝しておりますm(\_)\_m では、失礼いたします」。クリニックは多くのお母さん達との関係で成り立っています。本当にラッキーですという言葉、これはお互い様です。良いクリニックと良い患者さん、これは大事な関係です。この言葉、そのままお返ししたいと思います。クリニックとしてラッキーです。ありがとうございました。



今回はスペースに余裕があるので、「お母さんクラブ」の印象記を掲載します。記事でも紹介したように、仙台北警察署のご協力を頂き「子どもを守る防犯対策」(生活安全課)を開催しました。会員11名と非会員2名の13人の参加がありました。参加した宮城野区の大島さんの印象記を紹介します。「子供が犠牲となる事件が後を絶たない今日、ニュースを見る度に心が痛みます。今回の子供を守る防犯対策のお話は、とても身近な問題として聞く事が出来ました。親は子供の事を把握しているつもりですが、その「つもり」が事件や問題への落とし穴になる事。また、面倒な事へ関わりたくない大人が増えている社会状況が、子供を犠牲にしてしまっている事...改めて考えさせられました。私の子供はまだ1歳と、

1人で外の世界へ行く事はありませんが、近い将来私達から離れ、社会の中へ行く事を考えると、家庭でのコミュニケーションと地域の協力が不可欠であると思いました。今回も貴重なお話ありがとうございました(^\_^)」。一面にも書いたように、家庭でできることが、最も大切なことです。この場を借りて、仙台北警察署のご協力と講和を頂いた本田さんに感謝致します。ありがとうございました。

### 1月の感染症の集計



水痘と溶連菌感染症が多くみられ、特に溶連菌感染症は過去最高の数です。保育所と幼稚園で流行しています。症状の特徴は、発熱(高熱にならないことも)、のどの痛み、発疹です。注意して下さい。グラフには示していませんが、インフルエンザはわずかに52名で、終息に向かっているようです。むしろ嘔吐下痢症が多く、1月25日の北部休日診療所の担当の時は、65名の来所者の2/3は嘔吐下痢症でした。小松島小学校でも一時50人程度の感染が認められました。

### 予防接種の変更に関するお知らせ

4月1日から予防接種法が変わり、麻疹と風疹の混合ワクチン接種が始まります。当面は第1期(第2期は就学前1年間:5年後導入)のみで、対象者は12カ月~24カ月未満になります。3月中に1歳の誕生日迎えるお子さんは、4月以降なるべく早い時期に麻疹風疹混合ワクチンを接種するようにして下さい。

4月からは麻しん及び風疹の単独ワクチンの接種はできなくなります。接種する場合は、任意接種となり費用は自己負担が原則です。未接種者に対しては、救済期間が設けられるようですが、現時点では未定です。

混合ワクチンの無料券はクリニックに準備してあります。その他不明の点は、何なりとお問い合わせください。

### 掲載誌の紹介

- ・u-lu-la(製薬会社情報誌)  
「病院広報企画賞」受賞クリニックに学ぶコミュニケーションのための「広報学」
- ・HINT(医療情報誌)  
目指すものは患者への安心感
- ・河北ウイークリー土曜版  
インターネット情報を上手に使って安心子育て



1月のホスピタウで「子どもの病気・名医50人」に掲載されたのをはじめ、今年は当院の活動が様々な紙面で紹介されています。院内掲示及び見本誌を待ち合い室に設置してありますので、ぜひ御覧ください。また、河北ウイークリーは、3月11日に河北新報に折り込みで配付の予定です。お楽しみに。

### 編集後記

今年はインフルエンザの流行はほとんど無く、一時嘔吐下痢症が流行したものの暇なシーズンです。しかし、休日の忙しさは異常で、ここ5週間で4回東京出張。残り1回は北部急病診療所の担当、3月も出張・休日当番と、大忙しです。



院長著書「小児科医がやさしく教える 赤ちゃん子どもの病気」の再版にご協力を。詳しくはかわむらこどもクリニックHP(<http://www.kodomo-clinic.or.jp>)を